

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成30年2月 第204号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## しなやかに生きてバトンタッチを

昭和60年(1985年)10月にせいりょう園は50人定員の特別養護老人ホームとして開設し、以来30年余が過ぎて、当時も今も最も印象深く心に残るのが、しなやかに、したたかに、たくましく生きる認知症女性の姿です。

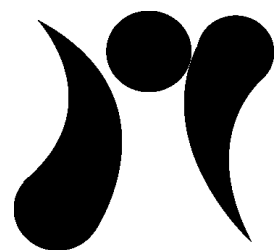
開設の少し前、有吉佐和子さんの『恍惚の人』がベストセラーになって、「痴呆老人」「ボケ老人」が世間の関心を集めました。「風呂の空焚き」や「コンロで鍋を焦がして」近隣の方が火事を心配し、息子や娘に働きかけて特養に入所する「痴呆老人」が多かった様に記憶しています。

平成12年(2000年)に介護保険制度が発足し、地域福祉・在宅介護を柱にして介護の社会化が図られて、介護を巡る関心と事業環境が飛躍的に変化し、痴呆も「認知症」と呼称が変わって今に至っています。介護保険は介護予防を中心に置き、予防効果に対して加算する仕組みが導入されて細かく複雑に変わり続け、今や介護現場が疲弊してきた様に感じます。

高齢期での予防効果は長くは続かず、老いを予防し切る方法も予防し切った人も無く、多くの人が老いの変化を受容れる準備が整わないままに、「老いの必然として訪れる最期」を予期せざるを得ない時を迎えています。其処に至って、ご本人とご家族・介護関係者がうろたえている様をよく見受けます。救急医療現場で超高齢者の救急救命に際して多くの戸惑い・混乱が報告され、医学会や国会においても「人生の最終場面を巡る議論」が広がっています。

そして何より、職業としての介護に魅力が無いのか、介護現場に働き手が来なくなり、全国の介護現場で人手不足が深刻です。その対策に国は、東南アジアからの技能実習生の導入を決め、大手事業者が中心になって採用し始めています。しかし、日本人にとって魅力が無い『職業環境』をそのままに放置して、短期就業の外国人実習生に頼るのは、その場凌ぎに過ぎません。

(次ページに続く)



(前ページの続き)

介護職に魅力があるとすれば其れは、介護が支える要介護の人の生活に『社会的な存在価値が有る事』が前提になります。老いて要介護になり認知症になった人に、社会的存在価値が「有るのか無いのか？」が今、鋭く問われているのだと思います。世間の多数は『子供に迷惑を掛けたくない』と、要介護や認知症になることを避けようと予防に努めます。その個人的願望に添って、法制度も行政施策も予防を明記し、強く推進します。しかし本当に老いて要介護になり認知症になる事は『社会の迷惑』なのでしょうか？人として『価値の無い姿』なのでしょうか？

せいりょう園では今、全体で百数十人が暮らす中で認知症とされる方々は常時100人を超えています。その100人の内に、精神科医院への受診や入院をお願いする人が、1～2年に2人か3人程は現れます。その上で、退所をお願いした方は30年間で10人に満たない程度で、それほど多い割合ではありません。大半の方が認知症の進行に伴って、初期の不安・混乱期からやがて安定期に入り、知性や理性を超え、利害・損得を超えた暮らしの中で、自らの感性・感覚と長年の生活で培った経験則を働かせて、しなやかな社会性を、したたかな生活力を、たくましい生命力を發揮して、老いの身を後輩達に委ね、穏やかに最期を迎えられています。

社会生活の達人としてしなやかに生き、人生の先達としてその最期の身を後輩達に委ねて、社会を構成して生きる為の『思想や人間性・社会性』を引継いで、バトンタッチ完了です。自然の摂理に添った老いの必然として訪れる『吾身の変化と死』を委ねる姿は、人生におけるバトンタッチの助走であり、その先達の助走に合わせて後輩達が寄り添う営みが『介護』なのだと思います。

だとすれば介護予防は、バトンタッチ拒否宣言であり、ピンピンコロリは助走の無いバトンタッチとなり、社会が引継げず、歴史が途絶える結果が遠からず訪れます。その危険性が今、芽生え始めています。一昨年の子供が98万人余、昨年は94万人余となり、政府は今の少子化の状況を「国難」と表現しています。その少ない幼児を虐待して死なせてしまう若い親達があります。学校でいじめられて、逃げもせず、反撃もせず、自死を選ぶ子供達があります。親も教師も教育委員会も、学校以外の居場所や、しなやかで柔軟な社会性を子供達に伝えず、教えず、互いに自殺の責任を押し付け合っています。

私達が介護現場で出会う認知症の人が見せる、しなやかで、したたかで、たくましい社会生活力が、生命力が、世間の人達には見えないのでしょうか？少なくとも若い親や幼い子供達には伝わっていない事は明白です。

『超少子』という国難に際して今、介護現場で認知症の人に伴走する介護専門職が、多くの認知症の人が見せる多様で柔軟な生活力・生命力・社会性を引継ぎ伝える重要な役割を自覚し、若い親や幼い子供達に「しなやかに生きる力」をバトンタッチする場面を創り出して欲しい、と心より願います。

介護現場には、国難を救う力とその道筋が潜んでいる、と確信します。

## ヘルパーステーションに異動して

ヘルパーステーション主任 川崎 賢一  
(介護福祉士)

H29年6月にヘルパーステーションに異動になって、半年以上が経ちました。現在の所属しているヘルパーステーションでは、定期巡回・随時対応型訪問介護のサービスをさせて頂いております。そのサービスは24時間365日定期的な訪問介護と24時間電話での連絡受けサービス(随時対応)、緊急時や必要時に随時訪問させて頂くサービスの3つで構成されています。住み慣れた環境で、重度になっても最期まで御利用者の生活を支援するサービスです。

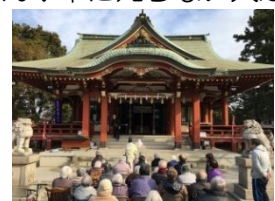
これまでユニット型特養や地域密着型特養といった施設での介護を経験してきました。多床室や個室等ハード面での違いはありますが、日々の業務に追われ、それをこなすことに精一杯になっていた所は共通していたように思います。ヘルパーでは全く異なり、在宅生活を支援する為1人1人のケアプランの中に最短45分の滞在訪問が週に最低1回はあります。その中でお部屋の掃除や買い物等を通して御本人と向き合い、御本人の意思を尊重しながらケアを行うことで、自立、社会参加、自己実現が出来るように目指しケアを行っています。

実際にケアハウスに住まわれているKさんはH29年9月に入居されるまで老人保健施設に入居されていました。車椅子での生活の為起きたい時に起きることや、トイレに行くにも職員を呼ばないと自由に行けなかったと聞いています。しかし、ケアハウスに入居され、自分で出来ることは世話になりたくないという思いから、トイレも今では自立されています。洗濯も自分でしたいという希望があり、洗濯物を持ち運ぶ所や、衣類、タオルを干す際はヘルパーが見守り、大判のタオルやシーツを干す等、御本人が出来ない事はヘルパーがお手伝いします。Kさんは日々チャレンジをすることで、自分の出来ることの線引きをし、生を実感されたそうです。時には便がたくさん出てすべて着替えないといけない事や転倒してしまう事もあるようですが、誰かと繋がっていることで安心感となり、出来なかった事をチャレンジしようとされています。

ヘルパーは、前述でも紹介した通り、1人1人の御利用者に向き合い自分らしく生活する為に御本人のペースに合わせてケアが出来る魅力的な仕事だと思います。在宅では、御本人、御家族を中心にケアマネジャー、医師、福祉用具のコーディネーター、訪問看護師、ヘルパー等、せりょう園内だけでなく、デイサービス、訪問リハビリテーション等、園外の事業所も交え1人の御利用者に対し他職種の職員が関わる為、連携が特に必要となります。その中で御利用者が自分らしく生活する為にチャレンジする姿勢を御本人の生活に一番近いヘルパーが把握し、どんな小さなことでも見逃さない観察力を養い、他職種との連携を図り、御利用者のチャレンジを尊重し柔軟にケアが出来る様に努めて行きたいと考えています。

### ～初詣～

1月15日、今年も浜の宮神社へ初詣に出かけました。入居者の方、ボランティアの方、職員と合わせて42人が参加しました。「去年も行ったな。確か遠かったやろ」「いや～嬉しい。大吉だったんだよ」「楽しいね。一人やったら外によろしく出んからね」「運転手さん!車に知らない人が乗っています」「どこまで行くんです?ちゃんと帰れます?」と去年を思い出されている方、不安を感じられている方、楽しまれている方と様々でした。参拝が終わると「あっという間やったな。一年もあっという間なんやろな。来年も行くからな」と話されていました。





## 介護サポーター研修に参加させて頂いて思う事

訪問医療マッサージ KEiROW 垂水南 ST

廣田 敬史

私の心に常々ある“要介護の高齢者との様に向き合うべきか”のヒントを探す事を目的として、せいりょう園で開催された“介護サポーター研修”に参加させて頂きました。

研修冒頭の渋谷園長のご挨拶の中で「多様で柔軟な持続可能な社会」の真意を学び聞きながらも、立ってご教示下さる渋谷園長に対して、椅子に座った状態のまま聴く私自身そのものが“人生の先輩から学ぶ意識”の低さの現われではないだろうか、と自問自答しながらの心苦しいスタートでありました。

グループ討論等を終え、私は特養の昼食場に配属されました。“何かお役に立ちたい”と意気込んで臨んだものの、言動が空回りばかりする私に対し、職員の方が「機能的に出来ない事は、こちらで察知してフォローをしますが、皆誇り高く自立をされていらっしゃるの、その人らしい生活を優先して頂きます」とお声がけして下さい、その優しくも強い言葉に感銘を受けました。落ち着いて周りを改めて見た時、高齢の皆様が逆に私に「お気を遣って下さっている現実」にハッと気がつきました。朝起きて顔を洗い、食事をし、排泄をし、お風呂に入り、趣味に興じ、そして安心して眠る、病気があったとしても病人としてではなく、「生活をする人」であること、独りで出来ない部分は手を借りながらもしっかりと日常生活を整え、そしてその日々の生活の中に「幸せ」を感じ取られている泰然自若な生き方を高齢の皆様から私は強く感じ取ったように思います。

場所を移してお茶会に参加させて頂いた時にも、高齢の皆様の高い「社会性」を学ばせて頂きました。普通の生活を送る中で、共に暮らす人がお互いに喜びや辛さを分かち合い、気遣いあって暮らし、そして自身の役割も感じて生きておられると感じました。ここでも私は職員の方々が素晴らしいと思いました。入居者の方へ接する時は“ケアしてあげる他人”ではなく、“共に暮らす住人”、まるで家族のようです。「ナースコール」ではなく、利用者の方の「気配」を感じて対応が出来るのです。職員の方にとって、まるで入居者の方は皆主人公であり、施設全体が入居者の方の住居です。それぞれ自分の場所や空間の持つ力に助けられながらも、自分の暮らしを貫いてほしいと願っておられる真心が言動にあふれていました。介護とは、数値やデータベースでは無く手を握り、五感を使い、息遣いを感じながら伴走する家族そのものである事を淀み無く大きく感じ取りました。

高齢者との向き合い方を自分なりに整理して行くと、要介護になって“介護を受ける事”は即ち“介護をさせて頂く方”に対し、大切な「社会性」を引き継ぐ重要な期間であり、人間としてのバランス感覚を正しくする最も重要なふれあい。昨今の「学校でのイジメ」や「競争社会での鬱」など、多くの寂しい社会現象は、世の中が核家族化していき、それが家庭養育力の低下や地域互助の低下を招いているのではないのでしょうか？そしてつまりは“高齢者とふれあうこと”が激減してきたことに端を発しているのでは？とも今回は考えるようになりました。世の多くの方が人生の先達から学ぶ意識と恩返しを今こそ日常に組み入れないと、それこそ日本の健やかな未来は無いのではないのでしょうか？

生き物としての感覚で本気で社会の仕組みを考え直す時期に来ているならば、真に高齢者から学び、それ即ち育てて下さった親への感謝、兄弟・友人との創発、後輩への分配と強く生きるための英知は繋いで行かないといけないでしょう。一人一人がもっと大らかになり、生かされている自分が何故生かされているかを考え、一番大切に思うことは何かを自分自身に問う。同時に高齢者や障がい者、子供たちなどの多くの「社会の光」と親しみ、共に学び、そして「社会性を伝える生き物」としての生き方を、覚悟を持って大切にすれば、おの

ずと幸せな国や社会が作れるのではないか。

せいりょう園での貴重な体験は、私自身の生き方に揺るぎ無い強さを与えてくれました。心から感謝致します。本当にありがとうございました。

廣田様はせいりょう園と長年関わりのある荒木商店に勤めておられます。機関紙を毎月読んでいただき、今回はサポーター研修への参加がきっかけで原稿を書いていただきました。

※介護サポーター研修とは、兵庫県老人福祉事業協会からの依頼により、せいりょう園で実施された研修です。目的は、介護職員の確保が困難な状況を踏まえ、中高年齢層、子育てを一段落した女性、離職者等を対象に、介護業務を1日体験する機会を提供することで介護現場の理解を促進するとともに、継続的に介護現場の情報を提供し、介護職への就職に繋げることです。

### 介護についてみんなで語ろう会 「食について」(1月26日)



管理栄養士 田村 愛弓

この度は調理の際、衛生的に気を付けるべき点や食中毒予防の効果的な方法、家庭で特別食を作る際のポイント等についてお話しました。また、会の後半では実際にせいりょう園で提供している特別食を試食していただきました。

はじめに、家庭でも起こる確率の高い食中毒「ノロウィルス」についてお話しました。参加された皆様もノロウィルスについてはよくご存じで、各家庭でさまざまな対策をされていました。しかし中には予防法として正しくない方法もあり、場面に応じた予防法を提案させていただきました。食中毒はそれぞれの原因菌についての知識があれば、簡単に予防することができます。ですがメディアからの情報や、人づてに聞いた方法で対応される方にとって予防法の応用は難しいのかもしれないと思い、専門職として情報の聞き取りや発信をしていく必要性を改めて感じました。

せいりょう園で実際に提供している特別食を試食していただいた際には、皆様から試食の感想や調理方法への質問が多くありました。試食として用意したのはきざみ食・みじん食・ミキサー食でしたが、食材の形が崩されていると何の食材かすぐにはわかりにくいと言われる方もいらっしゃいました。食事介助の際にする「声掛け」の重要性が、ここで実感していただけたのではないかと思います。また、園で使用しているトロミ剤についても説明し、家庭で特別食を作る際の注意点やトロミ剤の代用として片栗粉を使う危険性(※)についてもお話させていただきました。片栗粉以外でトロミ剤に代わるものはないかとの質問を受けましたが、ご家庭にあるもので簡単にできる代替え品は思いつかず、在宅で施設と同等の特別食を作る難しさを強く感じました。できるかぎり在宅でもできる方法をお伝えはしましたが、食のプロとして良い助言ができたとは言えず、自らの力不足を実感しました。

「食」は人が生きていく限り必ず生活の中にあるものです。食のプロとして、今後も新たな知識の習得と考察、正しい情報の発信をしていく必要があると改めて感じました。

#### (※)特別食に片栗粉を使う危険性

片栗粉は唾液中の消化酵素によって簡単に分解され、口腔内でトロミが消失する。その為片栗粉を使用してトロミを付けても、飲み物にトロミを付けず飲むことと同じであり、誤嚥の防止は期待できない。



天台宗 鶴林寺宝生院 幹 敬盛 住職

節分、立春と暦の上では春がそこまで来ていると言いますが、今日は数年に一度の大寒波と言われて、厳しい寒さです。何日間かこの寒さが続くようです。インフルエンザも猛威をふるっています。サービス付き高齢者向け住宅の玄関の水槽には、メダカや金魚が泳いでいますが、氷が厚く張って、その下で息を潜めています。入居されている皆様が毎日のように覗き込んで「かわいそうになあ。はよ氷が溶けんとな。」と声をかけておられます。時々エサをやる楽しみもありません。春が待ち遠しい事です。

本日は、天台宗鶴林寺宝生院のご住職 幹敬盛様です。お話しの冒頭から、今日の厳しい冷え込みの事から話されました。

「今年の冬の寒さは地球温暖化と言われていますが、そんな気がしません。これからまだ一段と寒くなりそうですね。今年のトップバッターをさせて頂きます。私は45歳、貴乃花親方と同じ年齢、身長も同じ187cmです。年初めと言っても2月になりました。2月の行事に節分の豆まきがありますね。貴乃花親方が豆まきしていました。昔は宮廷の行事で追儺会ついなえという名前がついていたそうです。宮廷行事の名残が残っている地域があります。九州大分の国東半島や、この播州地方でよく行われています。鶴林寺でも鬼を追い祓う行事をやっております。毎年1月8日にします。追儺会は、本当は12月31日にやっていたそうです。これまでの悪い行いを追い祓って、新しい年を迎えるというのが追儺会という行事です。仏様の前で自分が行ってきた悪い事を反省して、改めて新しい年を始めます。」

そこで、赤鬼、青鬼の面や鬼追いの様子を写した写真を見せてもらいました。多くの参拝者がつめかけ、伝統ある儀式の様子でした。

「鬼は本堂の仏様の周りをぐるぐる廻ります。時々参拝者の所へ出て来て廻ります。四股を踏んで仏様の周りを7回半周り『まいりました』と降参して、心を入れ替えて改心し、皆に福をもたらします。福をもたらすとして餅まきをします。また、新聞広告の大会があって、こんな事が書いてありました。『僕のお父さんは桃太郎というやつに殺されました。』と子どもの鬼が泣いている広告です。物の見方を変えますと、子どもの鬼がどんな気持ちになるだろうか？やられてばかりの鬼の気持ちになってみませんかという投げかけです。岡山県の学校の授業でも『鬼の気持ちになって考えてみましょう』という授業をしているそうです。

仏教の教えでは、悪いもの、嫌なやつを同じ仲間として引き入れてしまう働きがあります。私はお正月に村の方々の所へお参りに行ってお札を配ります。そこには『荒神』と書かれています。かまどの神様ですね。この神様は悪い事ばかりする神様ですが、三宝を付けて三宝荒神としてこのお札を家の守りにしています。人々に悪いものをもたらす神様を逆にお祀りして、皆が幸せになるように手伝いしてもらおう神様にしています。仏教では『同行二人』どうぎょうににんという言葉があります。四国のお遍路さんの背中に書いてあります。一人だけど一人ではない、弘法大師様がいる。また、浄土真宗の言葉では『御同朋御同行』おんどうぼうおんどうぎょうという言葉もあります。同じ仏様の前では皆同じです。

天台宗の法華経には『<sup>りょうぜんどうちよう</sup>靈山同聴』という言葉があります。靈山は昔、お釈迦様が法華経をお説きになった場所です。お弟子さんがたくさんいました。後の時代の人たちも弟子となり、生まれ変わって出会い、皆あの場所において、同じ話を聞いていた仲間ではないかという話です。年代や立場はそれぞれ違っても相手を快く受け入れて、外からきたものを皆仲間にしていく事です。悪いものや追い抜かれるものが皆に幸せをもたらすものになる。どこかに追い抜くのではなく、皆一緒にしてしまう働きがあります。このごろ、自分の物の見方が違うものに対して心の余裕、寛容さがなくなっていると思います。多様性という事を言いますね。いろんな立場はバラバラですが、皆仲間になって、違ったものをどこかにやっつけてしまわないで、一つのものだと考えて、同じ気持ちを持ち続けて下さい。年の始めにお願いしておきます。また、機会があれば来年1月8日の儀式には、是非来て頂ければと思います。」と話をされてご講話が終わりました。

子どもの頃にはよく『鬼追い』の行事に友人や弟たちと見学に行っていました。楽しく祭りのように弾んでいましたが、平安時代からの伝統的な儀式である事やそこに込められた深い意味を知る事が出来ました。参加者の方々もお話しに引き込まれていらっしかったです。

また、鶴林寺のいろいろな行事を教えてください。ありがとうございました。

(介護支援専門員：岡村 照代)



## Iさんの看取りについて

地域密着型特養 斉木 和真  
(介護福祉士)

Iさんはショートステイの利用前、せいりょう園のデイサービスを利用されていました。自宅で尻もちをつき骨折され手術後、介護老人保健施設に入所されていました。しかし馴染みのあるせいりょう園がいいとの事で、平成28年6月からショートステイの利用を開始しました。

ほとんど車イスでの生活でしたが、右大腿部骨折の手術をしたとは思えないほどで、自分のことは自分ででき94歳と高齢でありながらもとても元気な方でした。毎日のように息子さんが面会に来られ、気候のいい日には外へ散歩されたり、寒い日には熱いうどんを持ってきたりとお二人で過ごす時間がありました。

ショートステイ利用中は大きな体調の変化もなく、昨年2月にはインフルエンザでしばらく寝込まれましたがすぐによくなっていました。ところが10月下旬から発熱し咳もよくされるようになり、食事の量も減ってきました。できる限りのケアをしていましたが、苦しうにされているのを息子さんは見ていられなかったのかもしれない。受診のため病院に行きそのまま入院治療を選択されましたが、翌日病院で亡くなったと連絡がありました。

息子さんは、Iさんが今よりも楽になりまた元気になってほしいという思いがあったのだと思います。しかし私は馴染みのあったせいりょう園で最期までケアさせていただきたかったという思いがありました。

もし、私が息子さんの立場ならどうしているだろう、と考える看取りとなりました。

## 【せいりょう園陶芸教室イベント】



### ～ 土で“こいのぼり”を作しましょう～

5月、端午の節句にご自分で作られましたこいのぼりの置物を飾りましょう。信楽の土で作ります。

皆様、是非ご参加下さいませ。親子での参加もOKです。

指導：喜多 千景/中本 万理恵

開催日：3月18日（日）10：00～12：00〈定員10名〉

：3月19日（月）10：00～12：00〈定員10名〉

場 所：せいりょう園内「アトリエ一番星」

参加費：2,500円

問合先：せいりょう園（079-421-7156）

## 【職員募集】

せいりょう園の新規事業の求人です。

①放課後児童クラブの支援員

②保育士

詳しくはお電話でお問い合わせ下さい。（079-421-7156）



## 【サービス付き高齢者向け住宅入居者募集】

全室にバス・トイレ・キッチンが付いており、介護が必要になっても在宅サービスを利用しながら、最期まで自分のお部屋で暮らせます。

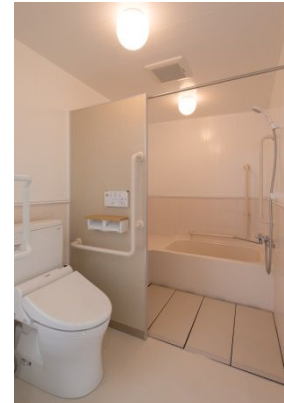
●自愛の家さくら（19.1㎡:6室、20.4㎡:1室、24.7㎡:2室、25.8㎡:2室）



↑ 24.7㎡



↑ 19.1㎡



↑ トイレ・バス付き

●リバティかこがわ（33㎡:3室、35㎡:2室、39㎡:1室、41㎡:1室）

【問合先】 せいりょう園（079-421-7156/079-424-3433）

## 【せいりょう園空き情報 平成30年2月13日現在】



●ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付 24㎡）

●グループホーム：空きなし ●グループホームまどか：空きなし